

# 発達障害がある人の 社会における生きにくさから支援を考える

～東京都発達障害者支援センターにおける相談支援の実際から～

平成24年1月31日

東京都発達障害者支援センター (TOSCA)

石橋悦子

## はじめに

東京都発達障害者支援センターには、日々多くの相談の申し込みがある。その内容は多様で、しかも容易に解決できそうにないことが殆どである。例えば、家庭内暴力、就労困難、社会的ひきこもりの長期化など、困難な生活の実態が明らかになっても、改善のための具体策が得られず、結果的に放置され、地域社会の中で孤立している事例が後を絶たない。

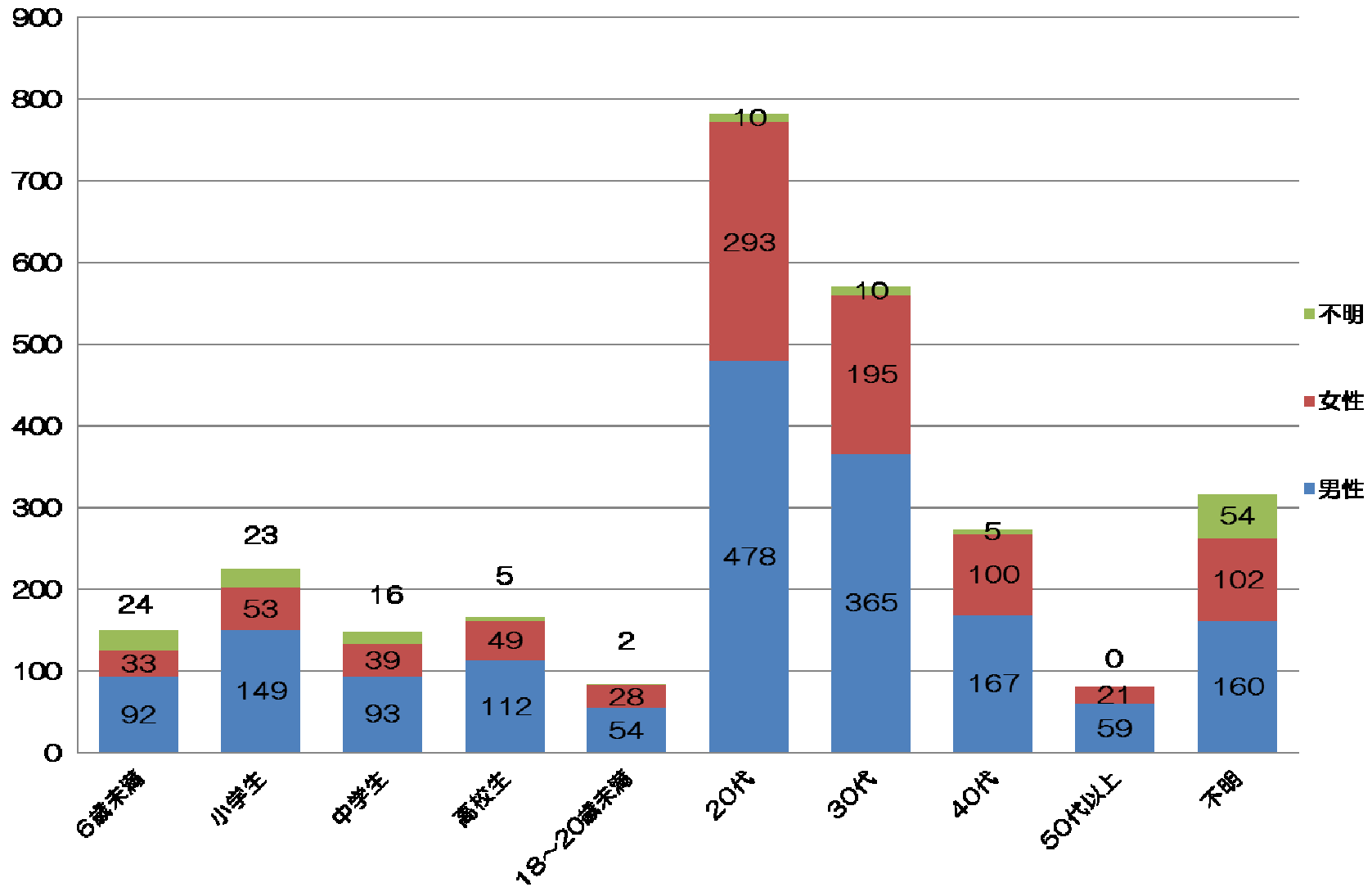
医学的な診断により「発達障害がある」ことを明らかにされるだけでは、本人の生活にかかわる相談・支援はすすまない。幼少期から二次的に形成された社会化困難という観点から、個別的な改善ニーズをとらえ、対応していく必要がある。具体的には、相談支援のあり方を新たに検討し、膠着状態にある本人の生活状況の改善につながるような家族支援(居場所の確保も含めて)について具体化していくことである。この取り組みの基本として、本人の自発性・主体性という心理的健康性への着目、そして、支援できる人の確保に努めている。実践経過を報告しながら参加の方々との意見交流を行いたい。

# 東京都発達障害者支援センター（TOSCA）

- 平成15年1月、社会福祉法人嬉泉が東京都より委託を受け事業を開始（当初の名称は「東京都自閉症・発達障害支援センター」）
- 都内において「発達障害者支援センター」は1カ所のみ
- 所在地は、世田谷区船橋1-30-9  
（小田急線千歳船橋駅徒歩5分）
- 職員配置
  - 常勤 4名
  - ※実際は、この他に法人より相談員（心理職等）や児童精神科医を配置している
- 主たる業務
  - 発達障害にかかわる相談や問い合わせへの対応
  - 関係機関・団体との連絡・連携。啓発セミナーや育成研修、さらにはコンサルテーションの実施。

TOSCAにおける相談支援の実際から

# 平成22年度相談・就労支援の実施状況 —年代別男女比率内訳等—



## 相談の内容 ～幼児期～

- 親側の不安が強く、家庭生活が不安定。
- わが子の幼稚園や保育所などの集団生活における我が子の参加困難に直面し、どう理解し対応していいのかわからない

※専門の医療機関や相談・療育機関にかかわっていても、親側の気持ち安定出来ず、不安を強めている人が少なくない。

# 相談の内容 ～学童期～

(親の主訴としては…)

- 学校生活において諸種の困難が生じ、どう対応してよいかわからない
- 家庭内において、子どもへの対応の仕方がわからない
- 発達障害の子どもへの対応がよい地域や学校などについての情報を知りたい

※とくに、「高機能」であるほど、本人の困難性が外側からみてわかりにくい。そのため、本人にとって必要な理解・配慮が得られず、周囲の対応が的はずれなものになりやすい。

→いじめやからかい、周囲からの孤立。自己評価の低下

## 青年期、成人期の相談概要

- 就労をはじめとする社会生活困難に関する相談が多い。
- 相談内容が多様であり、その後の支援を進めていく上での支援関係者づくりが重要である。
- 20～30歳代の人に関する相談が全体の約5割を占める
- 相談者としては、「本人のみ」が約3割、「家族のみ」が約4割である
- アスペルガー症候群などの高機能の自閉症スペクトラム障害の人が多い
- 成人後に発達障害の診断を受けた人が多い



## 具体的な相談主訴としては…

- 診断を受けたい
  - 診断後、就労を含めた生活上の相談にのってほしい
  - 就労困難、就労の継続困難
  
  - 仕事をしない、社会的引きこもり、孤立
  - 就労困難。家族間の関係調整困難
  - 家庭内暴力、借金の繰り返しなどへの火急な対処
  
  - ◆ 支援者との関係が安定しない。支援がすすまない
  - ◆ 本人が利用できる支援資源がない
  - ◆ 職場において諸種の困難が起きる。周囲も疲弊している
  - ◆ 本人の気持ちがわからず、どう対応してよいかわからない
- …本人、●…家族、◆…支援者など関係者

# 発達障害(とくに自閉症スペクトラム障害)の人の 社会参加のしにくさ

これまでの生活歴において、本人と周囲との関係から生じてくる不利な状態(生きにくさ)が長年にわたり続いている人が多い

- 社会の多数派の人たちがもつ常識や価値観に同化できにくい
- 他者の無理解や誤解される状況におかれて、絶えず注意や叱責を受け続けてきている
- 頼れる存在もなく、強い不安状態となっている



- 本人にとってさらなる困難な状況となりやすい
  - 対人被害感や他者への攻撃的な言動が生じてくる
  - 現実社会に対応しきれず、空想世界に没頭したり、こだわり、或いは頑固になることによって身を保っている
  - 社会から孤立しやすい
  - さまざまに困難な精神症状が生じてくる

本人の話から生活実態を知る

# 発達障害がある人への 支援について

## トスカからみた発達障害に関する現況

- 「発達障害」が知られるようになり、問い合わせや相談の申し込みが増加する一方である。とくに、発達障害の診断を希望する本人、或いは診断を受けさせようとする周囲の関係者が急増している。
- 生活困難、あるいは就労を含めた社会参加困難の実態は多様である
- 家庭や地域生活が危機的状況にある事例が多いが、支援のための制度・施策、支援理念や支援法が未整備であるため、相談しても、本人や家族の困難な生活状況がいっこうに改善されず放置されてしまうことになりやすい。
- 障害者支援の領域に限らず、一般の学校や職場において、発達障害について認識せざるを得なくなっている人が多い

# 発達障害者支援をよりよく進めていくための 考え方

## 1. 本人の生活が安定し、心理的健康が得られる

(本人のエンパワメント)

●社会の中で安定して生活できるように

●社会の中で、本人にとって心理的健康性が増すような生活を目指す

→いずれも本人が主体であること。あわせて社会とのつながりも必要である。

## 2. 本人が安心してかかわることが出来る人や 集団が不可欠である

## 3. 支援者側のエンパワメントと研修(支援力およ

# 支援者のあり方 (石井 2010)

## 1. 支援者の立ち位置

まず、人間は社会と関係をもって生きている  
生きるとは、社会の中にいること、人間同士  
関係をもつこと、から出発する。

しかし、人間同士の関係を結ぶことができず  
社会生活に参加できにくい人がいる。

それを「**本人の障害**」(医学モデル)と見ることから、  
「**社会の障壁**」(社会モデル)と見ていく。

## 一般的には・・・

- 外側から見えることにとらわれやすい。
- 一見して社会のフレームに馴染まない人を否定したり、嫌って排除したくなりがち。あるいは、社会のフレームに一方向的に合わせようとしがちである。
- 本人のみを対象にとらえて考えやすい。



**支援者としての発想の転換が必要**



## 2. 社会のフレームをどうとらえるか

- 社会のフレームも本人に働いているもの（影響を与えているもの）として捉える。
- 本人が捉えている社会のフレームの働きに任せ、見守る

＝社会のフレームを一方向的に介入させ統制しようとせず、

わかりやすいものに工夫しながら内在化を図る

\* ここでいう「社会のフレーム」とは、社会生活を可能にする行動の準拠枠のことをいう

# 発達障害がある人の内的世界と社会的フレームのギャップ

## 本人の立場から

- ・納得いかないことを強いられて
- ・いじめられても逃げられない
- ・他人の話がわからず、自分もうまく話せない
- ・思うようにならなかつたり、誤解されたりする
- ・気になることが多く、不安になりやすい
- ・自分の理解者がいない、家族間でも孤立している
- ・友だちができない

## 他人の立場から

- ・人の気持ちがわからない
- ・自分の気が済むようにこだわりを通す
- ・家族の生活や態度にあわせられない
- ・気になる行動が多い、すぐ怒る、パニックになる
- ・フラッシュバックの原因がわからない
- ・どう対応していいかわからない

## 支援の出発点としての窓口対応について

対人緊張や不安の強さ、コミュニケーションの困難があることへの配慮を行う

- 言葉のみのやりとりの対応困難への配慮
- 失敗経験による自信のなさや対人的な被害感の強さなどの配慮
- 本人独特の理屈やものごとへの考え方、とらえ方への理解と段階的対応

# 支援にかかわる基本的な理解

- 本人の抱える困難性が、外側からみてわかりにくい。  
障害特性の一般的理解では対応が難しい
- 他人の支援を必要としている一方で、対人的な問題が起きやすい



- 決められた支援内容やプログラムのみで対応しにくい
- 「障害者支援」あるいは「障害者雇用」の対象となっても、本人と周囲との間でミスマッチが起きやすい

## 本人支援について ①

※本人の現況により、支援内容や進め方が異なる

- 本人の言語性、非言語性コミュニケーションの状況
- 対人態度や現実場面(学校、職場など)への参加状況
- 二次的障害の状況(その発症の状況把握を含めて)
- 家庭の状況、家族との関係
- 本人の自己認知や障害があることへの理解状況

## 本人支援について ②

- 「周囲から問題とされている」ことの捉え直しをする
  - 問題となっている状況をもとる
  - その人は何で苦労しているのか



- その人にとって良い方向に向いていくための対応を考える
  - ① 人への警戒や防衛を解く
  - ② 内的な混乱状態を整理し、現実対応出来るように
  - ③ 自発性を引き出す。自己コントロールできるように



※「人から認められる」、「わかる」とか「できる」ことにより安心できる生活体験を重ねることが大切

# 相談・支援の過程 (石井 2009)

相談に来た人に対してどのように支援を開始し、  
かかわっていくことができるか

●見取りと見分け



●見立て



●関わり



●支援者としての振り返り

※支援者側の「立ち位置」が大切

# 支援者の関わりを整理する

- 支援者側の見とり・見分け

相手はいまどういう状態にあるのか。何に苦勞してい

るのか。本人と本人をとりまく生活の実態を広くとらえる

- 支援者側の見立て

本人や家族が生活改善に向けて主体的に取り組める

ようにするために、何をどうするのか。

- 関わりと振り返り

支援者として自分がどう関わるのか。自分の関わりが



## 支援者として心がけていること ①

- 刺激の整理とわかりやすい態度・言動
- 安定した好意
- 圧力や緊張を感じさせない気配り
- 相手の気持ちを理解して確かめる
- 本人の主体性を尊重する。表面的な行動化を焦らない
- 安易に制止しない。抑制的意見を出さない
- 相手への避難または批判を避け、客観的に道筋をたてて解説する

## 支援者として心がけていること ②

### ■ 面談については、インテンシブなかかわり方が必要

- 立場の明確化
- 先入観、社会的価値観にこだわらない
- 具体的にイメージできるように話す
- 本人が主体的に考えることができるよう

に話す

# 家族の健康性を高める支援とは

かつての日本社会のように、社会体制の中で安定した家庭の役割がとれるような仕組みがなくなってきている



- 「個」が重んじられ、親自身も孤立しやすい社会の中で人工的に人とつながることができるようなしくみづくり(安心して関わる場や人の確保)が必要
- それぞれの家庭機能を知り尊重する  
家族(とくに母親)が安定した気持ちで、主体的・自律的に生活をすすめていくことができるように
- 家庭の代替性、補完性としての社会的資源の活用

# 支援の実際を通して (一部紹介)

# トスカの相談支援をもとにした試行事業等

(法人事業として実施 ①)

## ■「発達障害相談における困難事例検証事業」

...H20～21年度に都委託事業として実施。家庭内暴力など反社会的行動を繰り返し、家庭や地域生活において著しく困難な状況が長期化している事例について、積極的介入支援を試行・検討した。

## ■「発達障害者社会参加支援普及事業」

...H22年度に都委託事業として障害者社会参加支援普及事業(都委託事業)として実施。学校卒業後、就労の意欲はあるが、既存の就労支援機関等の利用に至らず、家庭外に行き場のない状態が長期にわたっている人を対象に「働く場(ミニ・ワーク※)」の提供を行う。あわせて関係機関や関係者に公開し、意見交換等を行うことにより地域での支援体制整備につなげる試みとして実施。

## 試行事業実施を通して言えること ①

- 本人の立場から(困難)な事態を捉え直すことで、解決に向けた糸口がみえてくる
  - 生活場面における諸種の困難について本人側からとらえ、その対策について現実的に検討していくことが必要
  - 本人の生活の安定と主体的生活態度を引き出すための工夫
- 家族のありようを知る。家族としての自律機能が働くように、必要に応じて第三者の介入も考える
  - 本人にとって家庭が安心できる場になるように
  - 親が安定した気持ちで主体的に生活が構築できるように

## 試行事業実施を通して言えること ②

●本人や家族へのつきあい方、かかわり方を支援者が新たに学ぶ必要がある。関係者間で共通認識をもつことにより、本人や家族の味方になり、かかわることが出来る人が増える

- 本人の悩みどころを整理する。話が出来る関係を築くことが大切
- 相手の話の聴き方、相手への話の伝え方の工夫
- 本人の気持ちを追い詰めない(問い詰められること、注意や批判に対する耐性の弱さがある)
- 本人の気持ちや言動が一定せず、変化しやすいことがあっても

驚かない、嫌わない。

- かかわる側が孤立しない。一人で抱え込まない。

## 試行事業実施を通して言えること ③

### ● 本人にとって安心できる居場所を確保する

- 一般社会の常識や価値基準に一方向的に合わせるのではなく、本人の意欲や主体性など心理的健康性を活かすための「働く場」をつくることで、膠着状態にある本人の生活を変えていくことが可能になる。

### ● 息の長い支援が必要

- 短期的には生活安定化、中・長期的には、本人の自発性を促し社会参加をはかる。本人理解と支援のための「みたて」について支援関係者間で共通認識をもつ。